広がるトリ科学

―国際鳥類内分泌学シンポジウムに向けて―

国際鳥類内分泌学シンポジウムと日本鳥類内分泌研究会

=①=

アジアの力で研究発展

早稲田大学教育・総合科学学術院／先端生命医科学センター教授　筒井和義氏

鳥に対する科学的な研究成果は、食の分野だけなく、医薬品生産にも応用され、私たちの生活と深く関わりがある。動物の学習能力を探る研究でモデル動物として注目を集めているのも鳥だ。6月5～9日、岐阜市長良福光の長良川国際会議場で第10回国際鳥類内分泌学シンポジウム「ISAE2012岐阜」が開催されるのを前に、全国の研究者に最先端の「トリ科学」を寄稿してもらった。

筒井和義教授

国際鳥類内分泌学シンポジウム（International Symposium on Avian Endocrinology;ISAE）は、野生鳥類から家禽（かきん）にいたる鳥類全般の生理・行動・生態に関する内分泌学の研究成果を発表・討論する伝統ある国際会議である。

1977年に第1回国際大会がインドのコルカタで開催され、その後は4年に一度、欧州、アメリカ、アジア・オセアニアの各地域を巡る形で開催されている。日本は鳥類内分泌学の研究において常に世界を先導する立場にあり、多くの研究者が活躍している。

このような経緯から、記念大会となる第10回国際鳥類内分泌学シンポジウム（ISAE2012岐阜）が2012年の6月5日～9日に長良川国際会議場（岐阜市）において開催されることになった。

鳥類内分泌学の研究においてモデル動物として適しているウズラ

日本には、本国際シンポジウムと関連する日本鳥類内分泌研究会がある。理学、農学、医学などの研究者からなるこの研究会は、鳥類内分泌学の発展を図ることを目的として1975年に設立された。

35年にわたり毎年開催している学術集会には理学、農学、医学、薬学等幅広い分野から多数の研究者と学生が参加している。この学術集会には、毎年数名の著名な海外研究者も招聘（しょうへい）され、発表された研究成果は国際的に高い評価を受けている。

4年ごとに開催されるISAEでは、鳥類内分泌学の発展に大きな功績を与えた研究者に対しFarner賞が授与され、その功績を称（たた）えている。過去に7名の受賞者がいるが、1988年には小林英司博士（東京大名誉教授）、2000年には石居進博士（早稲田大名誉教授）、2008年にはISAE2012岐阜大会委員長である筒井和義（早稲田大教授）が同賞を受賞している。

近年、アジア諸国の科学技術の進歩は目覚ましく、ISAE2012岐阜を開催し、アジア各国の研究者の英知を結集することは世界の鳥類内分泌学研究の発展に重要である。

また、東日本大震災は日本の養鶏拠点の一つである岩手県や東北全域の飼料供給基地に多くの打撃を与えた。早期の復旧・復興にISAE2012岐阜が大いに貢献すると考えられる。

◇

寄稿文、国際鳥類内分泌学シンポジウムに関する質問、問い合わせは、ISAE2012岐阜会場運営委員の川島光夫岐阜大学応用生物科学部教授、電話058（293）2870、メールアドレスkawasima@gifu-u.ac.jp

くらし